

「多摩川河口干潟の観察」 現地報告

東京湾生き生き研究会 大野幸正

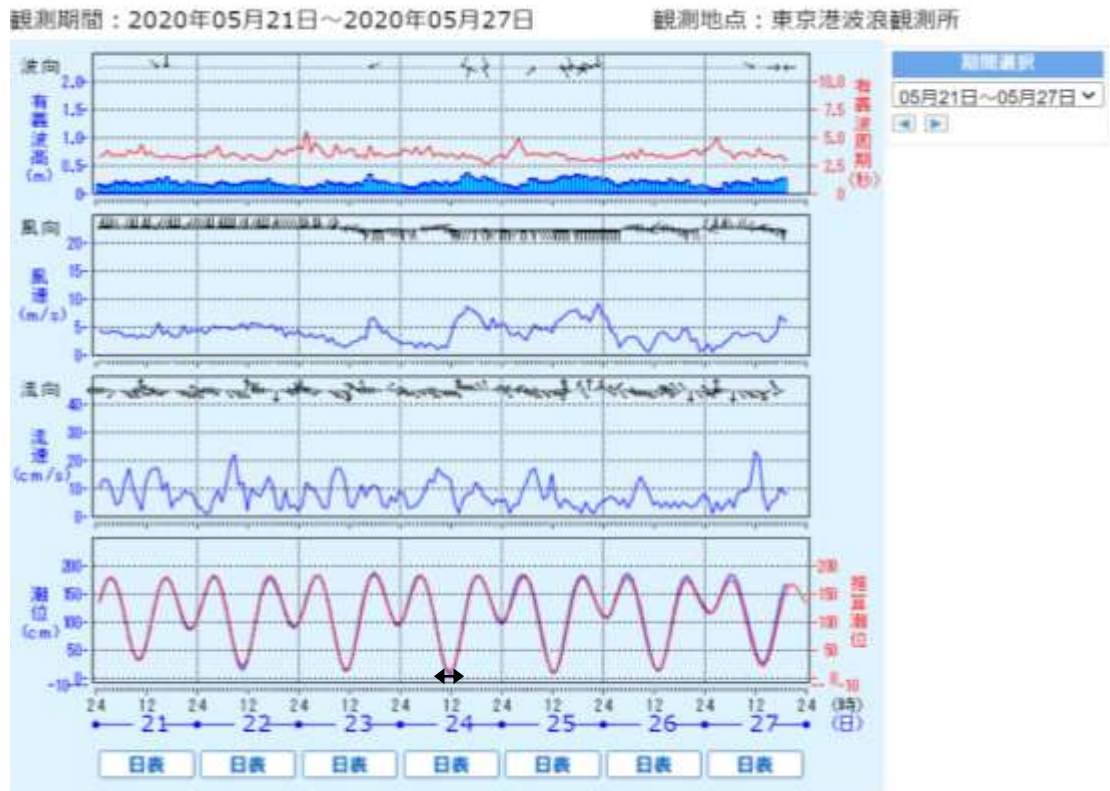
1. 観察の概要

日時：2020年5月24日（日）9：20～13：00

場所：多摩川河口干潟（基図は国土地理院の地形図）

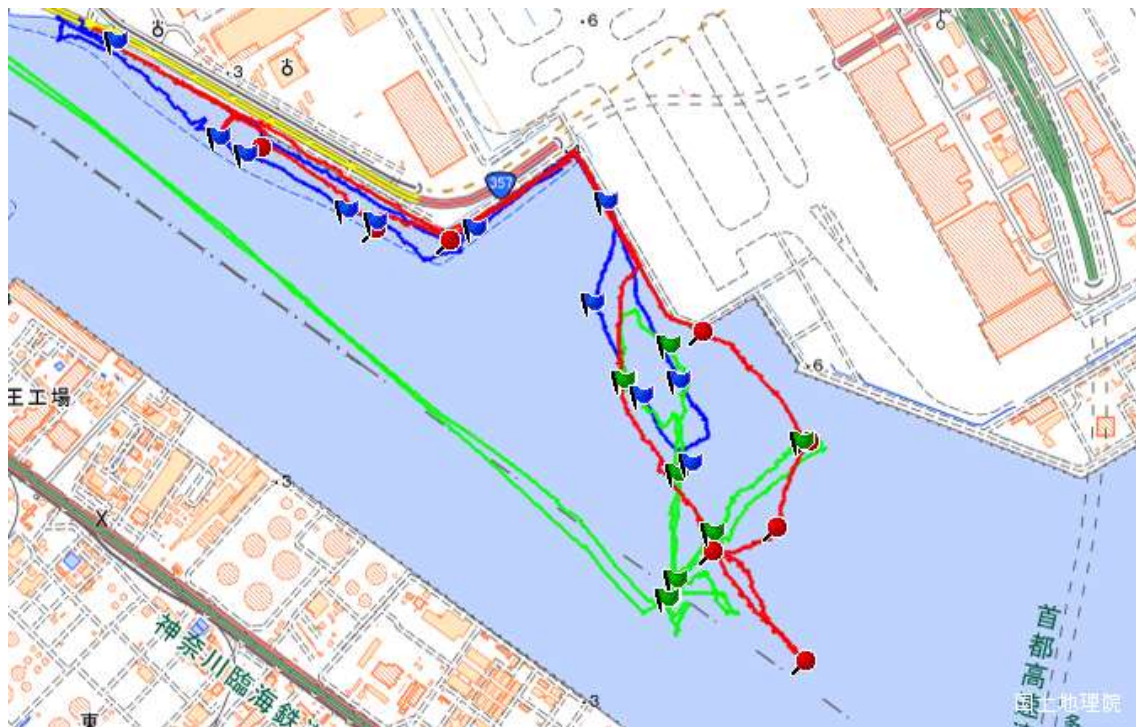
方法：干潟でのヒアリング及び徒歩採取、写真撮影

潮位：干潮時刻 11：40（17 cm）・・・東京港管理事務所資料



実測潮位図（出典：東京港管理事務所）

2. 観察のルートなど・・・2020年は赤線ルートで移動

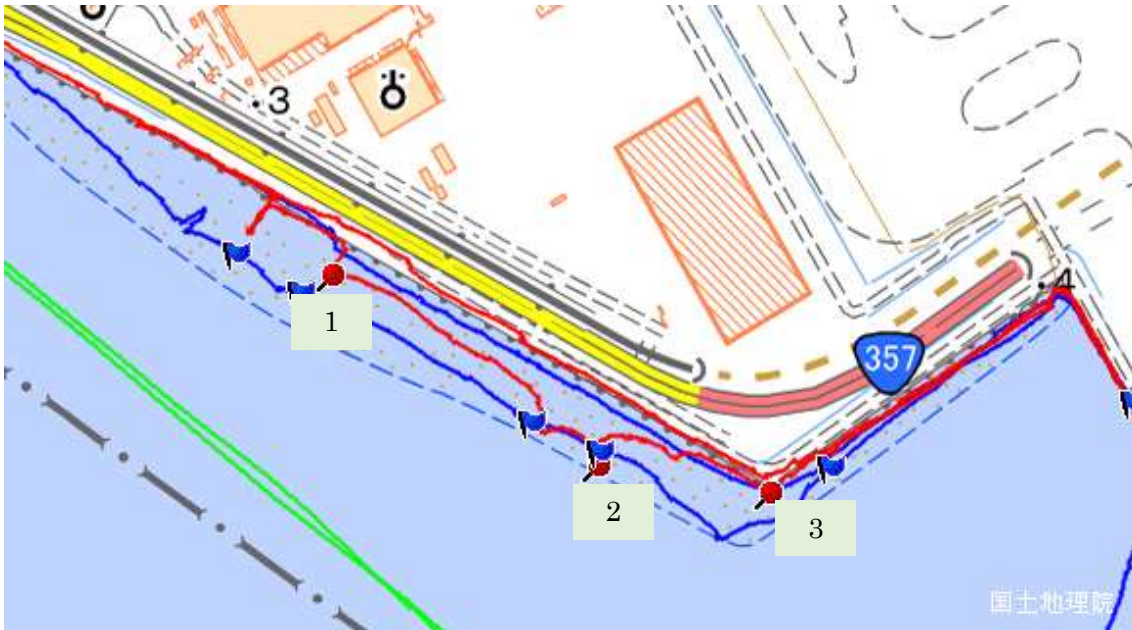


2018年：青線と青旗印（徒歩）、 2017年緑線と緑旗印（渡し船）
観察ルート全体図



多摩川河口干潟から航空道標とアクアライン風の塔を望む

3. 現地状況【エリア北側_1と2と3】



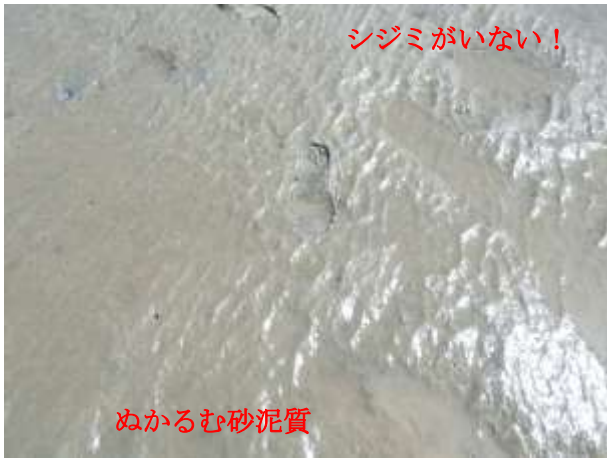
観察ルート拡大図 (エリア北側_1と2と3)

多摩川左岸の河口幅が広がる直前のエリアで、干出幅は20-30m程度と狭い範囲である。ぬかるむ範囲が比較的広いが、沈み込みは10cmに満たない。熊手で砂地を掻き、タモを使うと、アサリの稚貝、エビジャコ、ハゼ類の稚魚が確認できた。シジミは2018年も比較的少なかったが、今年は、この辺りには出現しなかった。

周囲にはアナジャコ捕りの人が数組いたが、熟練した感じはなかった。オサガニ類はいたが、近寄ると巣穴に逃げ戻ったために写真はなし。

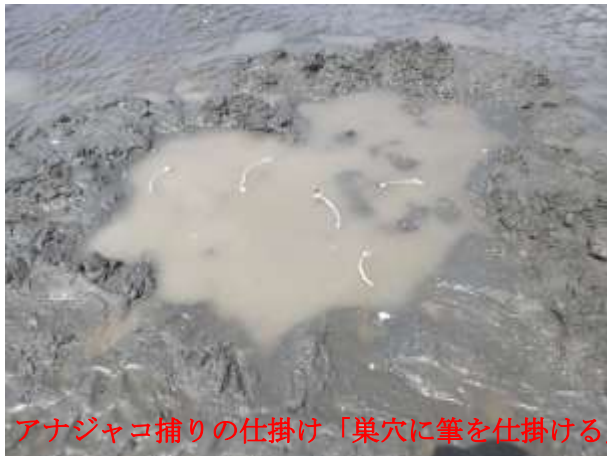
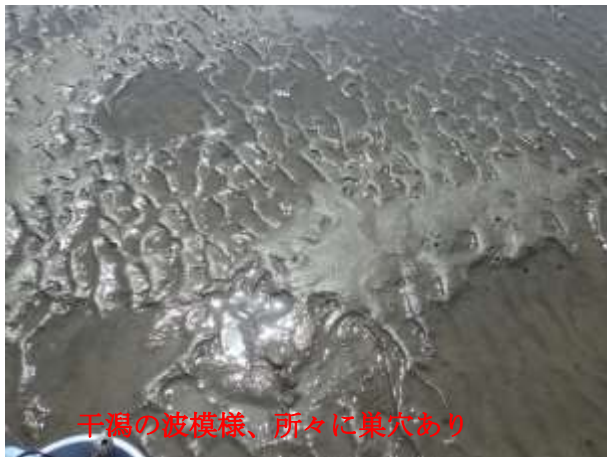
3のあたりは、結構ねっとりとした泥干潟で、貝殻が柔らかくて透明感のある貝(ソトオリガイ)が見られた。





2







岸辺は護岸と捨て石、カキ殻多し



3

結構ぬかるむ干潟 (3のあたり)



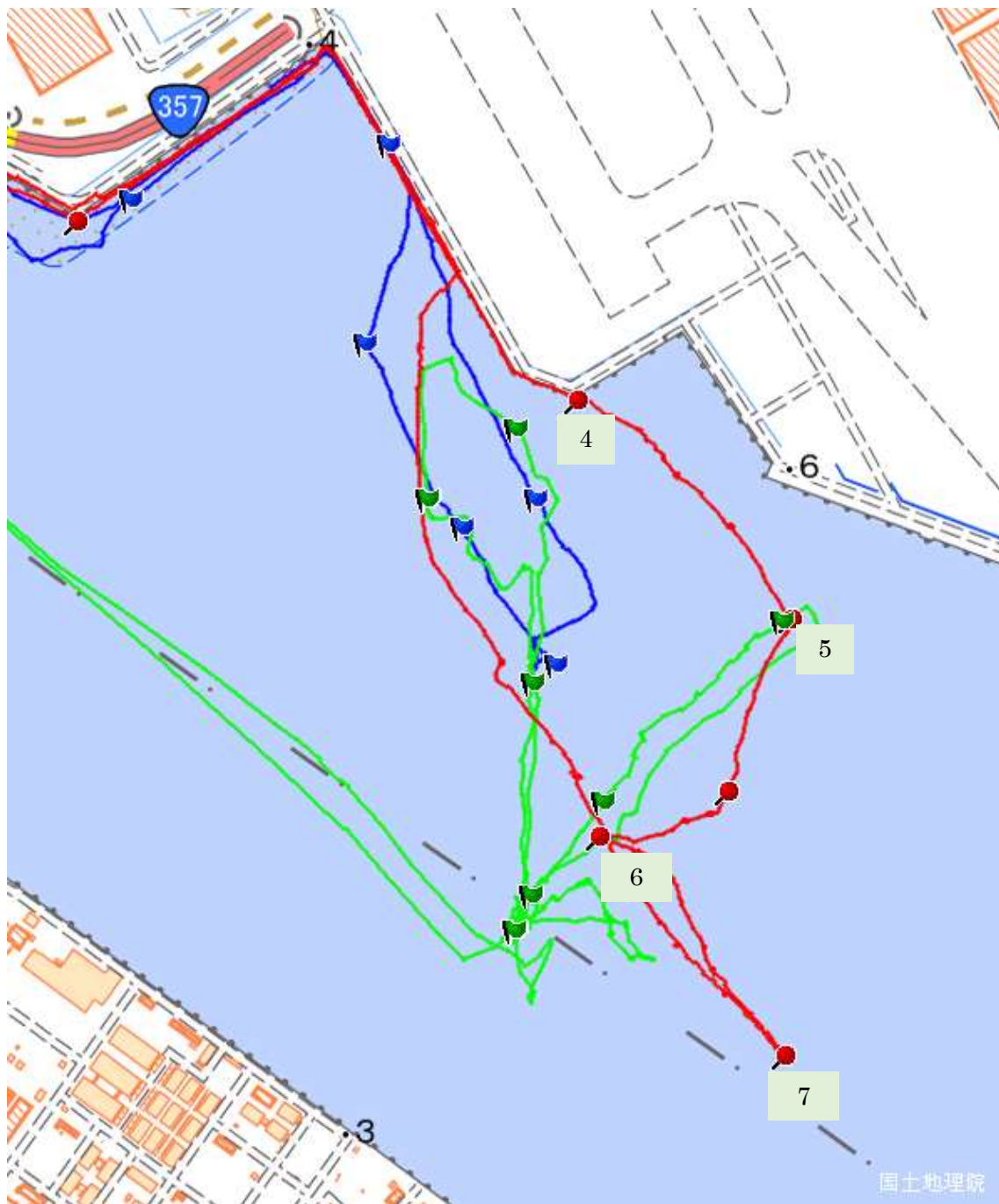
ソトオリガイ (透明感のある白い細長い貝)
エビジャコ



岩にカキ殻が付着



4. 現地状況【エリア南側_4と5と6と7】



観察ルート拡大図 (エリア南側_4と5と6)

今年確認した貝類はハマグリ 3 個、ホンビノスガイ 1 個、小さなシオフキガイ少々、バカガイ (小) 1 個、シジミ 1 個、アサリは稚貝のみ少々という状況で、2018 年に比べても減った。(2018 年は 2017 年よりも少なかった。) 海藻類 (オゴノリ、アオノリ類、アオサ類) は見られず巻貝はアラムシロガイのみであった。

4 のあたりではスジエビを確認し、5 から 6 にかけてハマグリ、シジミ、7 のあたりでホンビノスガイを確認した。



4



4の干潟風景



スジエビ



4のアサリ稚貝とエビジャコ



5の干潟風景

5





アラムシロガイ



シオフキガイ



アサリ稚貝

多毛類 (ゴカイ?)



5 から海 (河口) 方向



5 から対岸 (川崎) 方向



干出しないが、水深0.1m以内の水面が広がる



この辺りでハマグリ発見



結構大きなハマグリ



砂地に粘土質の土塊



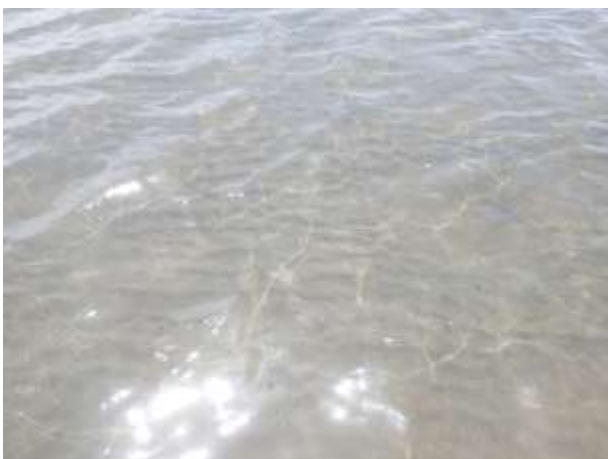
シオフキガイ



6から東京側



6から川崎側





アサリの稚貝はいるが・・・



漁獲物は、「ホンビノスガイ」



シオフキガイ、シジミ、ハマグリ、ホンビノスガイ



今回確認した貝類は、ハマグリ、ホンビノスガイ、シオフキガイ、バカガイ、シジミ、アサリ、ソトオリガイ、アラムシロガイ、カキ類。漁獲サイズのアサリ（殻長 2cm 以上）は、まったく獲れなかった。一昨年よりも海に向かったが同様であった。帰りがけ、アナジャコ捕りが増えていた。

干潟から食べ物、肥料などとして陸に取り出すことは物質循環の担い手となる。広大な干潟、アサリがたくさん獲れる干潟を回復することがかつての生産力を取り戻すことになる。何をすればよいのかを継続して模索する。

以上